

2021 年 1 月 24 日（日）「知恵を伴う富」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:11-12

11 財産を伴う知恵は幸せである。太陽を目にする者に益となる。

12 知恵の陰は銀の陰。益となるのは、知恵がその持ち主を生かすと知ること。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:11-12

11 資産を伴う知恵は良い。日を見る人に益となる。

12 知恵の陰にいるのは、金銭の陰にいるようだ。知識の益は、知恵がその持ち主を生かすことにある。

【序論】

聖書に収録されている 5 つの「知恵の書」（ヨブ記、詩篇、箴言、コヘレトの言葉、雅歌）は、読者に生き方の指針を示してくれます。アメリカの大説教者ビリー・グラハム（召天：2018 年 2 月 21 日）も、神との関係を学ぶために「詩篇」を、人間関係を学ぶために「箴言」を毎朝読んでいたそうです。私も小学生の頃、母と一緒に「箴言」を通読し、初めて聖書の面白さを知りました。今度は自分が親になり、息子と学びをする中で「友人関係」について教えてくれている箴言の箇所をさらってみたりしています。普遍的真理を代々語り継いでいくことは幸いであると感じる時です。

知恵文学は、確かに表面を読むだけでもある程度生き方の指針を聞き取ることができます。しかし、果たして文字通りに読んでいいものかどうか迷う箇所も少なくはありません（例：コヘレト 7:26）。その箇所では語られている真理を理解するためには、文脈に照らしてみることや、語句の意味や文化的背景を調べ、いくつかの解釈を並べてみてどれが妥当なのかを探ることが不可欠でしょう。これらは手間がかかりますが、著者が伝えようとしている「福音」を読み取る作業は楽しいものです。

知恵文学には金銭にまつわる教えも多く出てきますが、一見すると「お金」というのは宗教生活においてタブー視されやすいものであり、富を愛することを戒める箇所（例：コヘレト 5:10、I テモテ 6:10）とバッチェリングするようにも見えます。しかし、今日の箇所などを見てみると、コヘレトはお金の重要性を認めていることが分かる。神を信じる者たちが、地上で生きていく上で不可欠な「お金」とどう関わっていくべきかが教えられているのです。

【本論】

本論 1. 金銭の価値

財産を伴う知恵は幸せである。太陽を目にする者に益となる。(7:11)

「財産」(הָנָה/ナハラー)という言葉は、「所有物」「資産」「相続」「遺産」などと訳すこともできます(フランシスコ会訳では「遺産」)。全体的な雰囲気として、親から譲り受けた財産というニュアンスが読み取れそうです。

11 節には一つ、解釈上簡単ではない問題があります。「財産を伴う知恵」と訳された部分には、別の訳の可能性があるので。明確な例として、フランシスコ会訳では「知恵は遺産と同じく善いものである」と訳されています。この違いが出てくる理由は、「הָנָה」(財産) עִם (同じくらい/伴う) חָכְמָה (知恵)」の真ん中にある「עִם」(イム)という前置詞の意味を「同じくらい」か「伴う」か、いずれに取るかによります。フランシスコ会訳は「同じくらい」を選び、財産と知恵を同等の価値あるものとしています。一方、聖書協会共同訳や新改訳 2017 は「伴う」を選び、財産は知恵が伴ってこそ価値あるものだと説明しています。私の理解としましては、「עִם」が一般的に「伴う」を意味することや、また知恵の伴わない財産は人を不幸にする可能性があることをコヘレトが別の箇所語っていることなどから (5:18)、聖書協会共同訳や新改訳 2017 の訳が妥当と考えます。

実際、私たちの生活において臨時収入が入った際に、それをどう用いるかは千差万別です。ただ浪費してあっという間になくなってしまう人もいれば、お堅く貯金する人もあり、一部を使って一部を投資に充てるといった人もいます。あるいは、サポートしたいところに回したり、神様への献金としてささげる人もいるかもしれません。どのような使い方をするにしても、それはその人の生活の中で賢明に判断されるべきであり、知恵が求められます。神はすべての人にお金の管理を求めておられる。お金(賜物)を持っていたとしても使い方を知らないならそれは悲劇だと、コヘレトは 6:1 で語っています。

11 節後半の「太陽を目にする者」とは「生きている者」のこと。金銭とは現世においてのみ、経済的生き物である人間だけが扱うものと言えます。私たちの生活に密着したものであり、これなしには人生を考えることはできませんが、人が一生の間に持つお金の量には違いがあります。それは、賜物として神がお与えになる。その量の如何に拘らず、それをどう用いたかが神の御前に問われる日が来るのです。だからこそ、神に「富の使い方」の知恵を求めなければならない。賢明な人が財産を譲り受けると、その人は富を用いるにあたって、周囲の人々の益となるように考えます。だから、誰にお金を預けるかは重要であり、これは価値ある物を誰に使ってもらうかとも共通する問題です。

本論 2. 金銭は人を守る

知恵の陰は銀の陰。(7:12a)

この理解しにくいフレーズは、古代世界に一般的に広まっていた格言であろうと言われています。原文 (כִּי בַצֵּל הַחֲכָמָה בָּצֵל הַכֶּסֶף) を直訳すると「知恵の陰の中にあるから、銀の陰の中にあるから」となるでしょう。参考までにいくつかの翻訳を比較してみます。

- ・ 「知恵の陰に宿れば銀の陰に宿る。」(新共同訳)
- ・ 「知恵の陰にいるのは、金銭の陰にいるようだ。」(新改訳 2017)
- ・ 「知恵の陰に宿るのは、金銭の陰に宿るようなものだ。」(フランシスコ会訳)
- ・ 「知恵が身を守るのは、金銭が身を守るようである。」(口語訳)

ここでは「知恵」と「銀」が同等の価値を持つものとして描かれているようです。貨幣が流通していなかった時代、物品の購入には「銀」が用いられていました。「銀」とはお金を指し、つまりお金が人生の厳しい現実から守ってくれることを言い表しています。「陰」とは「シェルター」「庇^{ひさし}」のことで、飢えや苦しみのような「人生の日照り」から私たちを隠してくれるものとしての金銭の役割を表しているでしょう。この「保護者」のごとき「お金」と同等の価値を持つものとして「知恵」が置かれているのです。「知恵」とは、「日常の諸問題を解決する力」とか「人生の意味などの難問を解き明かせること」などと説明できるでしょう。

私はここ二年ほどS司法書士の許に通って、「信教の自由」や「宗教法人法」についての学びを続けていますが、つくづく思うようになったのは、この世界で生きていく上で人を守るものとなるのは、法律を熟知するということであります。法律を知っていれば人生に降りかかってくる多くの問題に適切に対処していくことができますが、知らなければ相手の言いなりになってしまったり、本来払う必要のないお金を当然のように払ってしまうということが起きてきてしまう。どこまで戦うべきで、どこで身を引くべきかの判断もできるでしょう。その意味で、知恵と知識はお金そのものよりも「身を守る」武器となる、確かにそうであるに違いありません。私は将来的にこの団体の働きを守っていけるよう、法律を学び始めております。

本論 3. 金銭は知恵が伴うときに所有者を生かす

益となるのは、知恵がその持ち主を生かすと知ること。(7:12b)

12 節前半では、「知恵」が「お金」と同等の価値を持つものとして描かれていましたが、ここでは「知恵」が優位に立ちます。ここには本来、「知恵」だけでなく「知識」とい

う言葉も入っています。聖書協会共同訳では「知識」(דַּעַת／ダアース)という名詞が「知る」という動詞に置き換えられていますが、念のため原文を直訳すると「知識の益は、知恵が所有者を生かすこと」となります。原文に近い訳は、新改訳 2017 の「**知識の益は、知恵がその持ち主を生かすことにある**」ですが（フランシスコ会訳もほぼ同じ）、聖書協会共同訳は意識でありながら意味が通りやすくなっています。

「生かす」(חַיָּהのピエル形)という言葉は、「命を与える」「命を覚醒する」という力強いイメージを持ちます。ここでは何が言われているのでしょうか。コヘレトは「お金」の重要性を認めつつ、「知恵」はそれを上回るものだと言っているのです。こうも言えるでしょう。お金は知恵が伴ってこそ真に価値あるものになると。お金の本来の役割に命を注ぎ込むものが知恵である。旧約聖書において「いのち」は「充実した神中心の人生」を意味します。つまり、神を畏れ、神から与えられる知恵をもってお金を管理していくとき、それは「保護者」の役割以上に、人生を生かしてやまないものになるのです。

新約聖書において、「知恵」は人格化されて（キリストを表すものとして）再び現れます。箴言からの流れで捉えてみましょう。

- ・ 私は知恵。熟慮と共にあり、知識と慎みを備えている。《中略》神が上にある雲を固めたとき、深淵の源に勢いを与えたとき、この原初の海に境界を定め、水が岸を越えないようにして、地の基を定めたときに。私は神の傍らで腕を振るう者となり、日々、神を喜ばせ、いつの時も御前に楽しむ者となった。（箴言 8:12-30）

ここでは、天地を創造した者として「神の知恵」なる方が登場してきています。

- ・ 御子は、見えない神のかたちであり、すべてのものが造られる前に、最初に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。万物は御子によって、御子のために造られたのです。（コロサイ 1:15-16）

ここにおいて、「神の知恵」とは御子イエスであったということが明らかにされる。

- ・ ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。（Ⅰコリント 1:24）

ついに、キリストが「神の知恵」だと明示される。このように聖書全体を見ていきますと、まことの知恵を得ることはキリストを知ることだという結論に至るでしょう。万物を創造されたのはキリストであった。その創造されたものの一つに「お金」が含まれている。そうであるならば、お金の用い方を完全に知っておられるのもキリストということになるでしょう。人はキリストの救いにあずかるとき、お金の真の使い方（神の御心に適った管理）も知るようになるのです。

【結論】

贖われる前、私たちは経済面でもどこか罪と結びついた生活をしていたかもしれません。しかし、主イエスは私たちの全生活を罪から贖い、そこにも聖さを加えてくださいました。それは真に知恵を得ることなのです。贖われる前、私たちは自分のお金のすべては自分のものだと考えていたのではないのでしょうか。しかし、聖書はお金もまた神のものであると教えています。そして、私たちはその一部を神のために取り分けるという知恵を得ました。私たちの生活と最も密着した部分を神に委ねる道を知ったのです。それによって、お金は主にあって私たちの「シェルター」となるのであります。

【祈り】

主権者なる神よ。すべてはあなたより出で、私たちのものは何一つありません。この地上の生涯は「与えられた」ものです。それゆえに、あらゆる分野において、神の主権を認めて生きられるようになりたく願います。しかし、人は経済面において弱さがあり、少しでも自分のものとして囲い込みたいという誘惑に駆られます。主がそこに自由を与えてくださり、主のために大胆に用い、更に主がそこに増し加えてくださるという御業を見させてください。無限の富を持つあなたに信頼して歩む一生を送ることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
無より有を創造し、世界にいのちの息吹を吹き込み給うた、父なる神の愛、
全人的救いのうちに、経済面での聖め、すなわち「神のもの」として管理する知恵を含め給う、主イエス・キリストの恵み、
持てるものの一部を聖別するところに、自由と、更なる豊かさを増し加え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。